
ラブカクテルス その42

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その42

【NZコード】

N4234D

【作者名】

風雷人

【あらすじ】

今宵は風を感じるような、酸味が利いたカクテルを「用意しました。ご賞味あれ。

いらっしゃいます。
どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフイズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？
はたまた、大人の香りのマティニー？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は風の便りで「じぞー」です。

「じぞー」と「じぞー」。

僕はある日、風に吹かれて飛んできた一枚の紙切れを拾った。

足に張り付いたその紙を何気なく見てみると、なんとそこには見たこともない美しい写真があり、僕はそれにしばし魅とれた。

しかし、それが何なのかが書いてある、肝心な部分は破けていて、
その名前すらわからなかつた。

だがその紙の残っていた部分には、きっとそれがあるだらう場所の
地図が描かれていた。

僕はそこがどこだか知つてゐる。

その地図の場所は、誰もが目指して止まない聖地、シャングリラだ
った。

しかしながら、そこに行くと言つた者は、誰一人として戻つては來
ない。

そこは、それ程の難所なのだつた。

たが僕は、その写真に映る美しい物が実際に見たくて見たくて仕方がなくなってしまった。

命を落とすほどの冒険か。

僕は咳き、その手の中にある紙切れを少し震える手で折りたたみ、ポケットに押し込んだ。

僕は計画を練る傍ら、旅の支度を始めた。

そんな中、食料調達のついでに、村一番の物知りな、ジジさんとのところを訪ねた。

ジジさんは僕に、本当に旅に出るのかと聞いてきたが、僕はつねに返事以外は何もせずに、その代わりに例の紙だけを見せた。すると、それを見たジジさんは、驚いた度合いが凄かつたらしく、しばらく口を開かず、やっと発した言葉は震えていて、これをビックでと、聞くのが精一杯といった顔をした。

僕は風のいたずらで手に入れ、それを探すために旅に出るのだと言つた。

ジジさんは、もしそうなら大変な旅になると言つた。

そして、金儲けのために、それを探す輩が多くいて、しかもそいつらときたら、かなりの野蛮人としても有名で、そんな紙なんて持つていたら捕まつて、何をされるか分からぬ。だから気をつけろと言つた。

ジジさんはそれ以上は何だか具合が悪そうになり、何も語らなくなつた。

僕は小さく礼を言つと、紙をまたポケットに押し込み、表に出た。

旅の支度が整い、僕は地図を片手に、誰にも知られることなく村を出ることにしたのだった。

朝日が、日の光が向かう先の山から登る。

僕は不安と期待のせいか、朝方の寒さのせいか、背筋にくるギザギ

ざな感触を背中に受けながら、その先を急いだ。

しばらくして、きっと毎くらいの時間になつてゐるだろう頃、辺りの景色は岩場になり、足元はいよいよ険しくなつてきた。

僕は空腹を不思議と感じず、歩を進めていると、ある高くそびえる岩の上から、誰かの呼び止める声がしたので立ち止まつた。

振り返つて岩を仰ぐと、そこには太陽を背にした何人かの人影が見え、やがてそれらは砂埃をあげて僕の方に近づいてきたのだった。

僕は絶対ポケットの紙を取られないよう気を張つた。

奴らはジジさんが言つたのと違つて、親しそうに僕に話し掛けてきた。

僕は何の用かと、慎重になつて、トラブルの時のために用意していした銃に、奴らに気付かれないよう手を掛け、もしもの時に備えた。奴らはこの先を進むなら、用心棒が必要だから自分達を雇えと言つた。

僕は当然断ると言つと、それならば通行料を支払えと、かなり無茶苦茶なことを言つてきたので、僕は笑つてしまつた。

奴らも笑う。

僕は思った。どうしたって多勢に不勢だ。まともにやつたらタダでは済まないだろう。

どうする？

僕はやはり銃を使うしか手は無いと覚悟を決め、奴らの前にそれを突き出そうとした。

次の瞬間、奴らは悲鳴を挙げて逃げ出した。

僕はそれがなぜだか分からずにはいる、だんだんと僕のいる周りの色が、全て黒に飲み込まれていくのが分かつた。

僕は後ろを振り返るが、そこには何もいない。それもそのハズ。

それは空から近づいていたのだった。
しかしそれに気付く頃には僕は、あつと言つ間に空へ連れ去られたのだった。

その時の衝撃はあまりに強く、耳がやられてしまったようだが、何とか見上げたそこには、僕を掴んだ足が、そして巨大な鳥が、かん高い奇声とも言える鳴き声を響かせて、羽ばたいていたのだった。僕は自分がどうなつてしまふかより、どこに行くのかが気になり、強い風に耐えながら地上の風景を頭に焼き付けた。

僕は半ば気を失いかけた頃、その化物はやつと下降を始め、クルクル回りながら下に見えた山の峰にある、高く太い木に留まろうとしているようで、近づくにつれ、そこには化物の子供が大きな口を開けているのが分かつた。

僕はやつとの想いで銃を握り締め、もう少しで餌にされる手前で、化物に二発、その子供達に一発づつ発泡して、その巣から転がつて落ちた。

僕はあちこちの枝に身体をぶつけて、それがクッショーンになつたせいで、何とか生きているようだつた。

フラフラした身体を起こして辺りを見回すと、そこにはかなりの数の人の骨が散らかっていた。

きつとあの化物の仕業に違ひなかつた。

僕は身体を引きずりながら、なるべく身を隠せる所を探してさまよつた。

僕の記憶が正しければ、紙切れにある地図の示す地所はそれほど遠くないはずだつた。

僕は地図を広げて、磁石を頼りに目的地になる洞窟を探した。

相変わらず何も聞こえなくなつた耳が痛み、それを押さえながら。

僕は上を警戒しながら歩きに歩いて、やがて夜を向かえることになつた。

化物のおかげで服は破けて、持つてきていた防寒具も無くし、山の冷え込んだ寒さに、寝るな寝るなと歩き続けるしかなかつた。

しかし僕は後悔してはいなかつた。

これほどの困難な状況にならうとも、僕の頭には例の写真が焼き付

いて離れずに、それが今の僕を動かす力となっていた。

しかしそろそろ限界なかもと、弱気になっていたのも事実だった。そうした中、夜が明けようと、日の光が頭を出して照らしだした先に、自分の胸くらいまで生い茂る草の向こう側の隙間から、洞窟のような穴があるのが分かった。

僕はしばらくそれを、ぼーっと見ていて、今自分が探しているそれにたどり着いき、目の前に現れた実感が沸かずに、立つたまま表情も変えずに止まっていた。

それでも体が先に反応したらしく、草を搔き分けて進むうちに顔が自然とほころんだのだった。

それを目の前に立ち、中を覗き込んだ。

意外の中は明るく、そして狭いが、しかし温かいことに驚き、その肌が感じる嬉しい感覚に、足は戸惑いも見せずに中へと踏み出した。すると、何か、赤い点が僕の身体の中心に浮き出て、次の瞬間、激しい痛みがその点を中心に広がり、僕はその場に倒れた。

激しい痛みがする場所を押さえて声も出せない僕を、何かが持ち上げたかと思うと抱えて、どこかに運んでいくようだった。

僕はされるがまま、抵抗も出来ずに、ただどうなるかを待つしかなかつた。

どうやら僕は、洞窟の奥へと運ばれていて、そのうち細く、低く、狭い洞窟はだんだんと拓けてきて、天井も高くなつた空間へと変わり、ドーム状に似た不思議な空間になると、僕は感情も感じられない動きで、いきなり投げつけられて地面に仰向けになり、転がるようになつた。

その何とも言ひようがない不思議な空間の、無意識に見てとれる天井は青く、何か白いものがフワフワと、流れるように浮いていた。きっと本能的だと思うが、それがとても気持ちよく思え、大きなため息とともに、なぜかほつとする気分になつた。

意識はだんだんと薄れていき、そのせいで体から痛みは感じられなくなっていた。

でも、鼻だけはまだ能力を失ってはなく、今までに嗅いだことがない香りに、それがする方に残りの力を首に集中させて、頭を動かしてみた。

霞む目のピントを何度も何度も調整して、それを見ると、そこにはあの写真にあった、まるで濁つた太陽の光を洗い流して汚れを落としたような美しい色の、見た目がなんだか柔らかそうで、ヒラヒラしたその小さく儂い姿、それがとても細い生命力に溢れる色の長いの首に不安定に乗つかり、そして地面から生えた何枚もの鳥の羽根のような足元は、まるで両手の手の平を合わせて、大切な大切な宝が落ちないように、優しく優しくその命を見守るように、しかししつかりと、生えているのが分かった。

写真を見た時から植物だとは思つてはいたが、そこら辺にある茶色の草とは明らかに違う輝きを放ち、静かに、ひつそりと、しかし美しく存在している。

きっと僕の命はもう幾らももたないだろうが、まあいい。

こんな美しくものが見れたのだから。

僕は手を伸ばし、それに触れようとしたが、少し腕を動かして、僕は生き絶えたのだった。

植物管理ロボットは、倒れた人間の横に、それが入るだけの穴を掘つていた。

そして、これでまた、たんぽぽの数を殖やせる。しかし人間の死骸がこんなにもいい肥料になるなんて。と透明な頭の中にある思考回路にあたる幾つもの赤や青のセンサーに光を走らせて、思うのだった。

もともと植物園だった栽培ホールは、そんなことにはお構いなく、人工に作られた青空の下、今日も植物に最適な環境を維持していた。

でもこの世界から花を無くしたのは人間だ。

自業自得と言えるのかも知れない。

ロボットはそんなことも思いながら、その作業を終えると、さつき死骸のポケットから取り出しておいた紙切れを、洞窟の外の風が強く流れる場所へ持つて出ると、見送るように風に乗せて、それを飛ばしたのだった。

紙切れはヒラヒラ風に運ばれ、また町へと戻つていった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのじ来店、心よりお待ち申し上げております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4234d/>

ラブカクテルス その42

2011年1月3日02時22分発行